
鎮魂歌 a f t e r

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎮魂歌 a f t e r

【Nコード】

N7705B

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

映画「探偵たちの鎮魂歌」その後、つまりネタバレです コナ
ンとキッドしか出てません 会話が主となっています ペロコの妄想
ワールドが広がっております そんなに長いわけではないつもり
ですが、セリフがけっこう長いところもあります 以上5点、了承
されてからお読みください。

(前書き)

あらすじにも書きましたが、作者ペロコの妄想ワールドが広がっております。

映画についての解釈は、それぞれの意見があると思いますが、ペロコはこう解釈したということ。

では、了承された方のみどうぞ

夜。 辺りは暗く、月の明かりが淡く届くだけの静かな夜。
一羽の大きな白い鳥が、とある場所を目指して夜の空中散歩をして
いた。

スーッと音もなく下り立った目的の場所 米花町5丁目、毛利
探偵事務所。

鍵のかかっていたはずの窓を難なく開け、中へ入る白い鳥。
カラカラ・・・と窓を閉め、窓辺にたたずむ。
窓の外からは淡い月光が射し込み、白い鳥を幻想的に浮かび上が
せる。

「不法侵入だぞ・・・」と、どこか幼いが、大人の雰囲気を含んだ
声の少年が静寂を破った。

「とんでもない・・・きちんと予告状に記したはずですが？」と、
こちらは軽やかだがしつとりと響く声で答えた白い鳥。

「ふん・・・コレか・・・」と、幼い声の主である少年は白い紙を
取り出す。

これは、いつのまにか、彼のポケットに入っていたものだ。

“ 淡い月光が辺りを照らし、静寂の訪れし夜
お見舞いにかがわさせていただきます。”

怪盗キッド”

「お前特製の暗号はどうした？」

「即席だったもので・・・申し訳ありません」

「・・・で？お見舞いつて何だ？」

「何だと言われましても・・・その言葉のままの意味ですが？今日あなたが怪我をなさったのでね・・・お加減はいかがかと。それで？大丈夫なのですか？探偵くん・・・」

その問いには答えず、『探偵くん』と呼ばれた少年は言う。

「お前が助けてくれたんだってな、怪盗キッド・・・」

そう、今日は・・・いや、もう昨日のことか・・・この探偵も怪盗も巻き込まれたとある事件で互いに紛争していた。その途中、この探偵は怪我を負ってしまい、怪盗に助けられたということだ。

「おや・・・気づいておられたのですか？白馬探偵が私だと・・・」
と『怪盗キッド』と呼ばれた白い鳥はわざとらしい口調で尋ねる。

「はっ・・・認めたくねえが、最初はもちろん分からなかったさ。
何しろ、白馬とは1度しか会ったことなかったんだから・・・」

「・・・では、いつ私だと？」

「最初におかしいなと思ったのは、お前が服部の携帯を盗っていた時だ。服部も探偵だ。アイツに気づかれずに、しかも坊ちゃんの白馬が盗れるわけねえ・・・」

「ホオ・・・」

「それに、バイクからオレと逃げたとき、ボール射出ベルトを使ったが、白馬の前で使ったことは無かったはずなのに、お前は驚きもしなかった・・・で、考えてみると、最初に白馬が姿を現した時オレの事を『小学生探偵』とぬかしやがったしな。白馬の前で推理したのは・・・無い事もないんだが、黄昏の館の時だけでそう判断するには早合点しすぎだ。賢いなどは思つかもしれねえが、探偵と判断するには証拠が少なすぎる。だから、分かったんだよ、オメエだっということがな・・・」

「ご明察。さすがですね、名探偵・・・」
「そういや、お前だろ？バイクの2人のうち1人をやったの・・・」
「そこまで気づいておられたのですか？ええ、そうですよ。子供1人にバイクに乗った大人2人とは・・・。あなたが飛び出して行かれた後、急いで追いかけたのですよ。そしたら案の定、あなたがまたとんでもない離れ技を披露していらつしやったので。落ちそうになったのを慌てて受け止め、代わりに小道具を1つ落としたのですよ。水音を立てるためにね。」
「そうか・・・お前が手当てもしてくれたんだよな。・・・コソ泥に言うのは癪シヤクだが・・・サンキュな。おかげで助かった。お前の情報も役に立ったしな」
「とんでもありません。私の方こそ、知りたかったことがたくさん分かりましたから・・・」

「ああ・・・深山美術館のことか・・・」
「ええ・・・この私を狙うのは100年早いことを教えてやれましたしね。こちらこそ助かりましたから。これでおあいこですね」
と、物騒なことをさらりと言う怪盗に、探偵は
「いや！まだだ！！」と反論。
「は？」と思わずまぬけな返事をする怪盗。
「お前・・・いつから見てたんだ？ジェットコースターの時」
「ああ・・・『謎は謎のままに』ですよ、名探偵？」
「お前こそ離れ技じゃねえか・・・あのコースター、猛スピードだったんだぞ？下手すりゃ、お前だって危ないじゃねえか！」
「クス・・・心配してくださってたんですか？」
「バ、バー口！なんじゃねえよ！」
「大丈夫ですよ・・・私に不可能はありませんからね・・・」
「ハッ・・・相変わらずキザなヤローだぜ・・・」
「お褒めに預かり光栄ですよ、名探偵？・・・さあ、もう時間ですね。探偵くんもしんどいでしょうし、私は退散させていただきます」

「おい・・・逃げられると思ってんのか？」

「ええ・・・心優しき探偵くんなら、私に借りがあるという状態で捕まえるだなんて思ってますしね・・・」

「うっ・・・この確信犯！」

「ではまた、いつかどこかでお会いしましょう、名探偵・・・」

「その時はオレも手加減しねえからな！」

「楽しみにしておりますよ・・・では」

と言つて、怪盗は窓を開け再び空へと舞い上がり去って行った。

残された探偵は、その白い鳥が見えなくなるまで見送り、窓を閉めながら

「次はぜってー容赦しねえ！！」と決心していた。

これは、探偵と怪盗が互いに健闘を称^{たた}えあつた、夜の物語・・・

(後書き)

みなさま、こんにちは。ペロコです。

昨日の「鎮魂歌」を見て、かなり興奮し、そのままの勢いで書かせていただいた駄文でございます。

この後、こんな会話が交わされてたら・・・と妄想からスタートし、このような結果となってしまうました。みなさまの期待を裏切っていないことを祈っています。

映画についての解釈ですが・・・

こんな感じで！（説明省略 笑）

みなさまはどう感じましたか？あの映画だけだと、コナンくんがどこでキッドの正体に気づいたのか分からないままという今まではありえない設定だったので、なんか書きたくなってしまっ

た。みなさんの意見も聞きたいですね。

それでは、こんな文に付き合っただけありがたいとございまして。

評価・感想・そして、映画の解釈（自論でけっこうです）などありましたら、書いてくださると喜びます。

それでは、これからもよろしくお願いしますね。

今更なのですが・・・毛利探偵事務所って、米花町5丁目でしたよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7705b/>

鎮魂歌 a f t e r

2010年10月9日01時18分発行